

## 現代若者考：「視線平気症」とケータイ文化

市川孝一

### An Essay on Younger Generations of Today: youth and mobile media

Koichi Ichikawa

いまどきの若い者は……

「いまどきの若い者は！」と言ったら、それは年を取った証拠だという。しかし、古代の遺跡から発掘された文字を解読したら、そこには「いまどきの若い者は……」と書いてあったという挿話があるように、このフレーズは人間にとっての永遠のテーマを示しているものでもある。昔から、新しい世代に対しては、先行する世代が必ず何らかの違和感を抱き続けてきたということである。

これは冷静に考えてみれば、実は極めて当然のことである。人間は時代とともに変わるものであり、生育環境の違う後続の世代が先行世代と異なっていること自体には何の不思議もない。その意味では、「いまどきの若い者は……」の嘆きは、至極当たり前の感情なのである。

筆者もその一員である「団塊の世代」も、今年中にはすべてが50代の大台に乗る年齢となった。ということは、20歳前後の学生たちとは、およそ30歳の年齢の開きがあることになる。30年をもって、一世代とする区分は昔から良く使われて来たもので、この基準からしても筆者たちの世代と今の大学生たちとは、まさに「世代」が違うのである。ジェネレーションギャップがあるのは当然である。

ということは、逆に言うとわれわれぐらいの年齢になれば、堂々と「いまどきの若い者は……」と嘆いてもよいということになる。十分にその資格があるということである。もちろん、「いまどきの若い者……」といっても、われわれが議論する場合にはどうしても身近にいる学生たちの話を中心になってしまう。そういった意味では、ここでの若者論は非常に限られた対象に依拠したものであることを、まず断っておかなければならない。

それはともかく、大学の教員となって21年間、その時々的大学生という若者たちと接してきた経験からすると、ここ数年来の若者の変容ぶりには目を見張るものがある。ちょうど一昔ほど前に、若者論がクローズアップされた時期がある。80年代の半ば以降、「新人類」論が一世を風靡したことがあった。1986年には、「新人類」ということばが大流行語となった。1960年代以降に生まれたドライで、物怖じしない若者たちが、明らかにそれまでにはいなかったタイプの人間として注目を浴びた。「異星人」などという呼び方もあった。

しかし、1970年代の終わりから80年代はじめの生まれである現在の大学生たちは、彼らともまた全く違っている。すでに、80年代に「新人類」や「異星人」などという大げさな名前を使ってしまったので、それに代わる適当な言葉がないのだが、彼らこそ本当の意味の「新人類」＝ニュータイプだという実感がある。これまでの日本人と明らかに異質な存在なのである。「新新人類」「超新人類」「超異星人」といった名前がふさわしい。

彼らと日々身近に接していると、「一体お前たちは何を考えているんだ!?!」「お前たちは一体何者なんだ!?!」と頭を抱えることが少なくない。

### 傍らに人無きが若し

最近の若者たちの行動の特徴をひとことで言い表すと「傍若無人」ということばに集約されるような気がする。彼らの振舞いは、まさにその言葉本来の意味の“傍らに人無きが若し”である。具体的にいくつか例をあげると、彼らの電車内での行動、例えばウォークマンのイヤホンから音を漏らしても平気だとか、携帯電話で大声で話をする、平気で飲み食いをする、女性であれば化粧をする等々である。あるいは、人目もはばからずいちゃつくカップルもこれに加えなければならない。ウォークマンの「シャカシャカ」、ケータイでのおしゃべり、いちゃつくカップルは車内の三大公害である。ちなみに、車内でいちゃつくカップルには、どういうわけかかっこいいカップルは皆無である。どれも決まって不細工な男女の組み合わせであることは断言してもいい。これは実に興味深いことで、彼らの生態の背後に隠されている深層心理を探ることは面白いテーマとなるかもしれない。少なくとも「露出狂」にも似た病理を抱え込んでいることは確かである。

その他にも、「路チュー」といって路上で人目をはばからずキスをするカップル、所かまわず地べたに足を投げ出してべたっと座り込む「ジベタリアン」と呼ばれる若者たち。何処でも平気で飲み食いする「野食」と呼ばれる現象もある。

「野食」については、日本経済新聞が特集で大きく取り上げたことがある（「若者に広がる野食のナゾ」『日本経済新聞』1998年6月20日）。この記事では、「野食」を“従来の「食事が許される場所」以外で食べる行為”と規定した上で、それが広がった要因として次のようなものを上げている。

- ① 500mlのペットボトルの普及（1996年春から、国内製品も解禁になり、97年にはブームとなった）。
- ② 「中食」の普及（「なかしょく」というのは、外食でも内食でもない、コンビニの弁当やおにぎりなど、すぐに食べられるもの）。
- ③ 食生活が不規則になったこと（「食事はきまった時間にするものではなく、必要なときにする」と食事についての考え方が変わった）。
- ④ 90年代のグルメブームの反動
- ⑤ 恥の感覚が薄れた（“はしたない”という感覚が忘れ去られた）。

①から④は食を取りまく環境、食習慣の変化に関わる問題である。これらの変化に伴って、「食のマナー」も変わるの当然である。ここで重要なのは、やはり⑤の要因である。アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトが日本文化を「恥の文化」と規定したのは、良く知られているが、“恥の文化”ももはや過去のもの”という議論も多くの人から指摘され続けている。この記事でも、一従来「恥の感覚」は、家庭のしつけで培われて来た。しかし、家庭の教育機能が失われてしまっている。しかも、今や大学や企業もその代替機能を果たせなくなっている。

「大学生なのだから」「うちの社員なのだから」というような帰属意識がなくなっているので、恥ずかしい行為をしてはいけないという歯止めの役割をするものがなくなってしまった。—という解釈を示している。

### 視線平気症

最近の若者の行動の特徴に対し、「視線平気症」という言葉が与えられることがある。もちろん、「視線恐怖症」をもじったものである。そして、この「視線平気症」は「恥の感覚」の欠落という議論とぴったり重なってくる。恥の意識というのは、いうまでもなく「他人の目」や「世間の目」を敏感に感じ取るところから発しているからである。

上にあげたいいくつかの事例は、「視線平気症候群」の具体的な「症状」としてもとらえることができる。若者たちの「傍若無人」な振舞いは、単にマナーの問題ではない。だからこそ深刻なのである。マナーの悪い人間は、おじさんにもおばさんにもいる。マナーやエチケットを知らなかったり、公德心を欠いている人間はどの世代にもまんべんなく分布している。

若者たちの周囲に対する無神経さ、無頓着さは単なる「礼儀知らず」というようなレベルではない、もっと根の深いものがあるような気がする。他人の視線が気にならないということは、自分の周りにいる生身の他者という存在を、実感を持ってとらえることができないということである。それは、「他者に対する想像力の欠如」と言い換えてもよい。周りにいる人間が、自分と同じ生身の人間であるという感覚が残っていれば、自分の振舞いが、他人にとっては不快感を与えものかもしれないという推測ぐらいは自ずと出来てくるはずである。

機械やメディアとの親和性は非常に高いのに、目の前にいる生身の人間とはうまく距離が取れない、コミュニケーションが出来ないという若者の特性が「コミュニケーション不全症候群」ということばで注目されたことがあるが、まさに根っこは同じである。

### ジコチュー人間とケータイ文化

そのくせ、自分の快不快にはひどく敏感なのが現代の若者の特徴である。いわゆる「ジコチュー」（自己中心的）人間である。彼らは自分が快適であることを何よりも優先させる。反面その結果が、他人にとっての不快につながることへの想像力は見事に欠落している。

やや牽強附会の感が無いでもないが、この「ジコチュー人間」と「ケータイ文化」の隆盛とは何処かで通底しているという気がする。携帯電話やPHSなどのいわゆる移動体通信メディアやヘッドホン・ステレオ（ウォークマン）が、若者たちの間で圧倒的人気を博している大きな理由の一つは、これらの「ケータイ・ツール」が彼らのわがままに見事に合致した道具だったからである。そもそも、ケータイのコンセプトは“いつでも、何処でも、私と一緒”というわがままなものであり、ケータイ・ツールはそのわがままな欲求を満たしてくれるものである。

携帯化というのは、「ポータブル化」と「トランジスター化」によって、それまでは固定化した状態でしか使用できなかったものを身につけたり、手に持ったりして持ち運ぶことが出来るように変える事である。大げさに言えば、携帯化というのは人間を「時間」と「場所」の制約から解放してくれる。その意味では、携帯化は人間の昔からの夢であり、人間の普遍的な欲求に根ざしたものであるともいえよう。

どの領域の生活用具の歴史や技術革新の歩みを見ても、そこに必ず「携帯化」の大きな流れを見出すことが出来るのはそのためである。しかし、今日の若者たちにケータイ・ツールが圧倒的

に支持される理由はこれだけではないように思われる。彼らの「欲求の充足の遅滞」を許さないという特性に、ケータイ・ツールが見事に合致している事も大きな理由である。

「聴きたい時にすぐに音楽が聴ける」「話したい時にすぐ友達と話が出来る」という「したい時にすぐ出来る」という点が重要なのである。「欲求の即時充足」こそが、彼らにとっては何よりも大切な事なのである。「待つ」ことや「待たされる事」は彼らにとって最も苦痛で「カッターライ」ことなのである。

新しいメディアの登場は、われわれの生活行動や生活感覚さらには美意識までを変えるものである事は良く知られているが、たとえば携帯電話の登場は「待ち合わせ」という生活行動のあり方を全く従来のものとは異なったものにしてしまった。「待ち合わせ」における「時間厳守」という観念はもはや意味を持たなくなってしまうのである。同時に、待ち人に対する「わくわく」や「ドキドキ」といった期待と不安の入り交じった微妙な感情もどこかへ消えてしまっただろう。少なくとも、恋人たちの「すれ違いのメロドラマ」などというものが成り立たなくなった事は確かである。

### 「傷つきたくない」症候群

話はやや横道にそれてしまったが、若者の特性についての議論に戻ることにしよう。彼らは何よりも「自分自身の快」を優先させるのだが、同時に自分が傷つくことには異常なまでに敏感である。

傷つけないためには様々な努力をする。その一つの有効な方策は、何事にも深く関わらない、コミットしないということである。逃避といえまさにそのとおりののだが、確かに深く関わらなければ、傷つくことはない。人間関係においても、他人と濃密な関係を作らないことが傷つけないための秘訣なのである。他人の内面にまで入り込んで、他人と深く共感しあうことが、かつては「やさしさ」の証明であった。だが、今では他人と深く関わらないことが新しい「やさしさ」であるといわれる。

例えば、身近に接する人間と決定的な対立関係になることは極力避けなければならないから、シリアスなテーマについて議論するような状況はなるべく作らないようにする。当然のことながら、大学のゼミなどでも活発な議論が闘わされるということはない。テレビドラマやタレントについての他愛の無いおしゃべりでは雄弁だが、人生観やら基本的な価値観に関わる問題については沈黙が支配する。沈黙は、「しゃべりたくない」という意思表示でもある。今の大学は、“授業は「私語」で、ゼミは「死語」（言葉が死んでいるという意味）だ”などと言われる。

他人と決定的な敵対関係になることを避けようとする傾向は、彼らが多用する「あいまい語」にも良く表われている。「○○みたいな」「○○とか」「○○感じ」などの断定を避ける表現である。常に相手の確認を求める、語尾を上げる「半疑問形」表現も同様の意味を持っている。「あなたのいうことは良くわかりました。でもあなたの意見にすべて同意しているというわけではありませんよ」「私はこう思います。でもそれをあなたに押し付ける気はありませんよ」と常に断りながら、お互いに確認し合いながら会話が進められているというところである。

### 「仕切る人間」が不在

その他の大きな特徴としてあげられることは、最近の学生たちは集団を組織することが苦手だということである。良い意味での「仕切る人間」がいない、リーダーシップを取る人間がいない

ということである。この点は、ここ数年の顕著な特徴である。従来は、例えばゼミの世話役（幹事）などというものは、自然に誰かしら自ら進んで引き受け手が出て来たものである。それなりに適性を持った人間が、自主的にかつボランティアにその役を引き受けるとというのが自然の成り行きで、そういう形でなんとなくまくおさまっていた。

ところが最近では、自ら手を上げる人間がいなくなって来たのである。「みんなで話し合っただけで決めたら」と、こちらが提案してやっと仕方なく動き出すのだが、話し合いでは決めることが出来ない。最後は、「あみだくじ」などを作って、無理矢理担当者を決めるようなお粗末な解決法に頼っている。ところが、そんな理不尽な手続きであっても、その結果については、当たってしまった当事者も特に不満を言うわけでもない。その結果を甘んじて受け、「不運」にも素直に従ってしまうというのもまた不思議である。

最近では20人程度のゼミでも、ひとつの集団としてまとまるのが難しくなって来ている。ここ数年は、ゼミのコンパとかゼミ合宿なども全員が顔をそろえるということがない。そのなかの3、4人とか、4、5人とかのさらに少人数の「仲よしグループ」で行動する方を好むのである。

ある程度の大きな集団で何かをやるということが苦手で、集団行動に拒否反応を示す学生が増えている。例えばそうした傾向は、毎年行われている学生主催の学部単位の「卒業パーティー」への出席者の激減などにも良く表われている。10年前には、この種の集まりには卒業生の大部分が出席し、盛大に行われたものだが、この会への出席者が年々減少してきた。一年ごとに2分の1、3分の1へと大きく参加者を減らし、昨年度などは5分の1ぐらいいままで落ち込んだ。学生よりも教員の姿の方が目立つという惨澹たるありさまだった。念のために断っておけば、これは決して女子大などがやる「謝恩パーティ」ではない（もちろん教員の側にも、はじめから「謝恩」してもらいたいなどという気はないのだが・・・）。教員と学生がともに卒業を祝おうという「卒業パーティー」ですらこの状態なのである。彼らはまた、彼らなりのコスト意識を持っているのである。会費と同じ金額でもっと楽しいことが出来るとなれば、躊躇なくそちらを選ぶ。「お付き合い」という義理の感覚が全く無いので葛藤を感じる必要も無い。最近の学生たちの見事な「個人主義」と「合理主義」の発露の事例として興味深いエピソードである。

### 「自分探し」が大好き

もう一つ、今の若者たちが大好きなのが「自分探し」である。もともと思春期・青年期はいわゆる「アイデンティティの模索」の時期に当たり、「自分とはなにか」を自らに問う、そういう年頃である。これは多かれ少なかれ、誰もが経験する青年期特有の課題である。従って、「自分探し」は青年期特有の普遍的現象であって、何も今日の若者だけに見られる特徴だとは言えないということにもなるだろう。

それはそのとおりだが、自意識ばかりがやたらと肥大化してしまっている今日の若者たちには、とりわけこの傾向が顕著に見られるということである。特に、筆者が所属している人間科学部の学生などにはその傾向が際立っている。人間科学部を受験しようというような学生は、もともと人間の内面に関する興味が強い。ウチヘウチへと興味が向き、逆に社会や文化など人間を取り巻く外的な条件への関心は希薄である。

人間の内面＝ココロ＝心理である。そういう彼らにとっては、心理学とりわけ臨床心理学といったものが極めて魅力的な領域に映るらしい。人間の心を科学的に解明してくれるのが心理学であり、人間のココロの謎を解き明かしてくれるのが、臨床心理学だということになる。

確かに世間一般に広がっている心理学のイメージはそういうモノである。“人間の心理を科学的に解明してくれる学問”それが心理学であるという「常識」である。“人間のココロがわかるのが心理学だ”というわけで、あたかも「読心術」のようなものを思い描いている人さえいる。「人の気持が分かるようになる」のが心理学だというのも、よくある誤解のひとつである。それだったら、心理学者は人間関係を巧みに調整することが出来、対人関係のトラブルからは無縁だということになる。ところが、現実はおおむね逆の場合が一般的である。筆者も「社会心理学」を専攻として名乗っており、その恩恵の一部に浴しているのだが、常々思うことは、心理学ほど世間から過大評価されている学問はないということである。実力以上に買い被られ、良い方に誤解されているのである。

しかし、心理学が解明できたのは人間のココロのほんのわずかな一部分にすぎない。それはちょうど、広大な宇宙の一部しかまだ解明されていないのと同じである。もちろん病気の種類にもよるが、臨床心理学もまた、ココロの病に対しては概して無力である。わかりやすいたとえで言えば、それは風邪薬のようなものではないだろうか。風邪薬は風邪の諸症状の緩和はしてくれるが、風邪のウイルス自体には効かないということは良く知られている。臨床心理学はちょうどこの風邪薬のようなものである。もちろん精神医学だったらオールマイティかということ、そういうわけでもない。精神医学もまた、科学としては成熟度の低い学問である。だからこそ、その領域の権威と言われる大先生たちが動員されても、同じ一人の人間の精神鑑定に、全くバラバラの結果が出て来たりしてしまうのである。

いずれにせよ、自意識が異常に肥大化した彼らは、「本当の自分は何か」を捜し求めることに躍起になっている。同時に今の自分には満足せず、何とか「自分を変えたい」とも思っている。自分を何とか変えたいという彼らは、その限りでは実に向上心あふれる若者たちだと言ってもよい。彼らはまた概してまじめである。そういう彼らだからこそ、心理学や臨床心理学の中に安易にひとつの解答を求めてしまいがちである。人間のある側面に光を当てているだけに過ぎない個別学問のほんの一部をかじっただけにもかかわらず、まるで「人生の達人」にでもなったような勘違いをしてしまうのである。不安感にさいなまれ自信が無かった彼らが、その反動で妙に自信にあふれてしまう。これは極めて危険な状態である。

彼らに教えないければならないのは、謙虚になることである。「そんなに人間や人間のココロは簡単に分かるものではないんだよ！」「君が触っているのは、巨大な象のしっぽの一部にすぎないんだよ！」ということを教えてやることこそ必要である。一番難しいのは、「わからないということがわかること」「知ることができないということを知ること」だが、なかなかその境地には到達できない。

今の自分に満足せず、「本当の自分とはなにか」と自分探しをする彼らはまた、安易な自己改革（変革）に走りがちである。自己啓発セミナーとか新新宗教の顧客や信者になりやすいのもまた彼らである。先にも述べたように、今の自分に満足せず、何とか自分を変えたいと思うその限りでは、彼らは向上心にあふれ前向きな精神の持ち主だともいえる。しかし、短期間にしかも他力本願で自分を変えられるなどと思うところがそもそも間違っている。その心根が卑しいし、その発想があまりにも安易である。自己変革したければ、厄介な自分と向き合い一生格闘していくしか道はない。

以上長々とオヤジの繰り言のような駄弁を弄して来たが、これらの若者の特性はすべてわれわ

れ先行する世代に跳ね返ってくる問題である。「子どもは親の言う通りには育たない。親のするように育つ」という名言があるが、それにならって言えば、「若者たちは大人の言うようには行動しない。大人がするように行動する。」ということになる。上で述べたような若者を生み出したのはわれわれ大人であり、大人が作って来た社会である。つまるところ、若者の問題はわれわれ先行する世代の問題であり、もっと大きく考えると今日の日本社会の問題であり、日本の文化の問題でもある。若者は世の中の変化を先取りし、未来を予告してくれると同時に、現在と過去に反省をせまるきっかけを与えてくれる存在である。

#### 参考文献

- 大平 健『やさしさの精神病理』岩波書店、1995  
藤竹 暁『若者にとって幸せとは』有斐閣、1994  
中島 梓『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房、1991  
千石 保『「まじめ」の崩壊』サイマル出版会、1991  
千石 保『「まじ」の哲学——平成若者論』角川書店、1996  
千石 保『「モラル」の復権』サイマル出版会、1997